地元企業の参入探る

県鉄構工業協同組合40周年シンポ

計画概要、理解深め

ILC 東北誘致

地元企業のＩＬＣ建設への参入可能性や外国人研究者らの受け入れなどについて議論する佐貫智行東北大准教授（左）らパネリスト

県鉄構工業協同組合（小山田周石理事長）は5日、盛岡市内のホテルで創立40周年記念シンポジウム「国際リニアコライダー（ＩＬＣ）誘致と市場創造―鉄の可能性を探れ―」を開いた。講演会やパネル討論で、ＩＬＣ計画の概要や設計内容などを説明。参加者は、ＩＬＣの建設やまちづくりなどへの地元企業の参入可能性、外国人の受け入れなどについて理解を深めた。

パネル討論には、東北大理学部の佐貫智行准教授や東北経済連合会の西山英作ビジネスセンター長、鹿島建設東北支店の加納実専任役、東芝東北支社の茂野誠支社長、三井物産東北支社の佐藤秀之支社長が参加した。

それぞれの企業が、ＩＬＣの加速器や測定器、地下トンネルの概要、まちづくりの基本的な方向性などについて説明した。

さまざまな国籍や宗教の外国人との交流について、佐藤支社長は「新たに建物を造らなくてもよい。地元の学校とインターナショナルスクールとの文化交流など、研究者の子どもと地元の子どもを通じた交流は有効だろう」と強調した。

ＩＬＣ建設や稼働後のメンテナンスへの地元企業の参入について、西山センター長は「青森県の国際熱核融合実験炉（ＩＴＥＲ）の関連施設では、工事に地元や近隣の企業が関わっていた。ＩＬＣでもチャンスをどうつかむかが重要となる」と述べた。

佐貫准教授が「東北における主な加速器関連施設とＩＬＣ計画」と題して講演。佐貫准教授は「ＩＬＣは科学的、技術的に価値のある研究施設だ。誘致は大きなインパクトなので、東北の復興や地域活性化のために大いに利用していい」と助言した。

佐貫准教授（東北大）講演要旨

5日に盛岡市内で開かれた県鉄構工業協同組合の創立40周年記念シンポジウムで講演した、東北大理学部の佐貫智行准教授の講演要旨は次の通り。

加速器は電子などの粒子を電気の力で加速させる装置。衝突させるためには電磁石を使い、電磁石は鉄の芯に電線を巻いたものなので、加速器は鉄の塊といえる。基礎科学研究だけでなく、産業や医療などにも応用されている。

東北にはＩＬＣのほかに、東北放射光施設や山形大のがん治療装置など、加速器の最先端の計画がめじろ押しとなっている。

ＩＬＣは岩手と宮城県にまたがる北上山地の地下への設置が計画されている。電子と陽電子を加速させて衝突させ、どういう現象が起きるかを調べる。

現象を調べる検出器は、巨大なデジタルカメラで、これも最先端のセンサーが組み込まれた鉄の塊だ。だから鉄を作り出し、加工する技術を有する方々の力を借りないと完成しない。

ＩＬＣは科学的、技術的に価値のある施設。誘致は大きなインパクトなので、東北の震災復興や地域活性化のために利用していい。